大正九年十一月。東京府内某所。

「……ぅ…、ぁ……、ぁあ……っ、」

闇の中、少年は分厚い綿布団の上で身じろいだ。顔を埋(うず)めるたび、敷布(シーツ)からはほのかにシャボンの香りがする。大戦も終わり世の景気が一層良くなったからといって、少年のような村奥の貧民の出(で)が、こんなものに横たわれることなどそうそう無い。自分の置かれた状況が状況でなければ、少年だってこの寝床の立派さをどんなに喜んだかわからない。

「ふ……、ぅ…、ぅう……っ、」

体内に熾火(おきび)のようにわだかまる熱に苛(さいな)まれる。じりじりと内側から焦がれるような、喉の渇きにも似た苦しみに少年は今朝からずっと耐えている――。
不意にがちゃ、と上方で扉の開く音がして、少年の肩がびくりと跳ねた。

「いやあ、今日はわざわざお招きくだすって、どうもありがとうございます」

「いや、なんです。わたくしのほうこそ、ご足労をいただきまして……」

男たちが話しながら、階段を降りてくるようだ。

会話の内容からどうやら客らしい男の声を、少年は知らない。それに加え、階段を降りてくる足音が二人や三人でなく、もっと大勢らしいことが少年を怯えさせた。

「顔をお上げ。今日は猟奇雑誌の記者の方にお越しいただいたよ」

にわかに少年の視界がぼうっと明るくなる。
少年の主人の男―無精ひげを生やし、薄くなった頭髪を脂ぎった皮膚に撫でつけている―の持つ西洋燈(ランプ)が辺りを夕暮れのような色に照らし、立派な梁や階段の漆(うるし)をつややかに浮かび上がらせる。濃い影が降(お)り、少年の肌やはだけた赤い襦袢(じゅばん)に格子状の模様をえがいた。記者と呼ばれた男がはっと息を飲む。
橙(だいだい)の明かりの中、木組みの格子の向こう側に横たわる少年の姿が、あまりにも妖艶めいて見えたためだ。乱れた襦袢の裾から覗く白くしなやかな脚や、うなじに伝う雫、紅潮した顔にはりついた長めの黒髪、その下で潤んだ大きな瞳(め)――。
実際どこをとっても少年は可憐で美しく、たった一枚女物の襦袢を着せられただけの恰好が、酷く見る者の欲を騒がせた。

「ぅ……、ぁあ……、」

少年は主人と記者の男、そしてその奥に控えている数多の視線に晒されながら、白い胸を喘がせていることしかできない。

「ほら、今日はお前をこの記者様の前で調教するために、皆様にお集まり頂いたんだ」

主人の男はがちゃがちゃと格子の錠を外しにかかった。
山奥の小さな農村の家に生まれた少年は、数年前今の主人に売られた。主人の男は吉原や上野に人身を斡旋し荒稼ぎをしている、要は人買い商人だ。男は少年を一目見るや上玉と唸り、初日から性的な仕込みを始めた。通常男娼の仕込みは脂薬(あぶらぐすり)と指、それから棒薬などを用い徐々に尻孔を慣らしていくものだが、この男は違った。少年の持って生まれた気品と色香に目が眩み、従来の手順も商売人としての節度も忘れ、初めから少年を我が物にした。男は毎晩少年を乱暴とも言える荒々しさで抱きつぶした。最初は痛みにただ泣き狂い男の腕の中でのたうっていた少年だったが、とある日から孔は綻び男の太(ふと)魔羅に歓喜を覚えるようになった。

「さあさ、皆様方お入り下さい。この地下で人目はございませんし、これは薬で慣らしてありますゆえ、手加減は無用です」

主人の男がおもむろに格子の出入口を開け、人々を中へ促す。
男たちは主人を除いて五人いた。記者と、その付き人のような風格の男。残りの三人は体格ががっちりとしていて背丈の高い、歳若い男たちだった。

「では、わたくしは格子の外におりますので。あとは存分にどうぞよろしく」

主人の男は下卑た顔で笑ったのち漆の光る床に悠々と腰をおろした。
記者と付き人は狭い空間でできるだけ端のほうへ寄ったのに対し、他の三人は唐突に着物を脱ぎ捨て少年の周囲に身を屈めてくる。

「噂通り綺麗な肌してんなぁ？」

「一体いくつだ？少年っつっても、俺ぁせいぜい十五、六だと思ってたぜ。こんな子どもだと思わなかったな」

「見ろよ。脚もこんなにすべすべだぜ」

男たちは無遠慮に少年の肌を弄(まさぐ)りだした。今朝主人に飲まされたあやしげな薬のせいで、少年には抵抗する力も湧かず、けれど触れられるたび淫猥な疼きだけは躰の芯に燃え立っていく。赤い襟から手が這い、汗に湿る痩せたあばらをなぞられる。襦袢の帯紐(おびひも)はほどかれて、膝頭を撫でまわした手がつつ、と太腿をたどり熱持った脚の付け根を探り出す。

「！っあ♡」

襦袢の下に息づいていた幼茎をやんわりと握り込まれ、少年の躰がびくんと跳ね上がる。

「すげぇな……。薬使ってるとはいえ、もうがっちがちじゃねぇか」

「先っぽから汁溢れてきてんぞ」

少年は膝を立てたまま脚を左右に開かされ、一糸をも纏っていない局部を晒す羽目になる。

「ほら、擦(す)ってやるよ」

「ひあっ……っ♡、」

ぬち、ぬちゅ……っ、と卑猥な音を立てながら、男の手が容赦なく幼茎を扱きはじめる。熱持った淫棒を擦られるたび、もうひと時も耐えられない刺激が少年の臓腑を駆け抜ける。けれど、少年は快感に身を委ねようとはしない。崩壊し蕩(とろ)けそうな精神を限界まで引き絞り、格子の向こう側にいる主人の顔を仰ぎ見た。

「ぅ……♡♡、あ…、ごしゅじん……さま……、」

少年は許可なく精を放つことを禁じられている。いかなる場合も、達しそうなときは主人に許しを請う習慣が躰に刻み込まれているのだ。

「達しそうなのかね？」

「ぅ……♡はぃ……。しゃ……、射精しても、よろしいでしょうか……」

少年の声は、躰の昂ぶりのためにかすれている。潤んだ大きな目が格子の向こう側からこちらを見つめる様(さま)は、酷く主人の情欲と加虐心を煽った。主人は首を横に振る。

「お前は少し堪(こら)えることを知りなさい。まだ前を触られただけじゃあないか。せめてこの方たちの一物を迎え入れるまで、我慢しなさい」

少年の瞳(め)が絶望の色に染まる。

「その代わり一度でも挿れられた後は、今日は何度でも達(い)ってよろしい」

「へ〜。男娼候補ってのも大変なんだなぁ？」

「っひ……♡♡♡♡っ、あ、ぁあ……っ♡、だめ……、」

少年の脚の間に腰を据えた男は、あろうことかますます烈(はげ)しく少年のそこを甚振りはじめた。先程にも増して、ちゅこちゅこといやらしい音が響きわたる。

「ぃや……！いやあぁあ……っっ！！♡♡♡」

髪を振り乱し喚けども、男の手は止まらない。
連続で響き続ける水音に合わせ、幼茎から電流のような快感が突き抜ける。がくがくと腰が滑稽なほど震えるのをもはや止められず、少年は逃れようもない淫猥な刺激に身を焼かれていた。
達(い)きたくない…達(い)きたくない……！
少年は胸の内でひたすら叫んだが、それももうすぐ無益に終わることを、少年の躰自身が知らせてくる。幼茎を擦られるたびぞくんぞくんと背が撓(しな)り、腰が布団から浮くほどに感じてしまう。調教中に主人の許可なく達してしまったことは幾度もあるが、そのたび少年は拷問とも呼べる仕打ちを受けてきた。ときには後孔から媚薬の混ざった水をふんだんに注ぎ込まれ、一日中立ったまま溢さず過ごすことを命じられ、またときには大人の腕二本分近くの太さの陽具を孔に咥えさせられたまま全裸で家中の掃除を命じられた。

「だめ……！♡だめえ…っ♡♡達(い)くのいや…っ達(い)くのいやあ……！♡♡♡♡」

滔々(とうとう)と流れ落ちる涙に視界がぼやける。どうにか快感を逃がそうと、両側で敷布(シーツ)

を強く握る。けれど男は面白がりますます幼茎を擦る速度を速めるので、少年にはこれ以上なすすべもない。そして、そんな男を止めようとする者も誰一人いない。人買い商人の広報活動――猟奇雑誌の記者を呼んでの公開調教は、こうして幕を開けた。

「だめっ……だめ……っっ♡♡、ぁ、ぁ……、ぁあぁあああ……っっっ！！♡♡♡♡♡♡♡」

もう何度目かわからない扱きを与えられた瞬間、眼前が白く飛んだ。幼茎から疾(はし)り抜けた快感が脳までまっすぐ打ちあがり、後頭部でばちばちと火花を散らす。熱い飛沫(しぶき)が幼茎の先端から噴き出し、薄い腹を濡らした――。

「良い記事になりそうですかな？」

霞む意識の遠くで主人の男が記者に問う。

「ええ……。それはもう……」

視界の隅の記者は二の句が継げぬほど感嘆した表情で頷いている。

「良かった。わたくしはですね、商品に手を付けてしまったのは後にも先にもこ

れきりなわけです。私的(してき)にここまで手を付けた以上、これはもう売り物にはなりません。けれど……、まあ見世物くらいにはなるでしょうということで今日はお呼び立てしたわけなんですけど……」

恥ずかしげもなく、主人はあけすけに本音を述べた。

「ご主人、素晴らしいですよ。良い記事になりますし、間違いなくこの界隈で有名になりますよ、この少年は……。売り物にはならなくても、見世物としては一級品です」

記者の言葉を聞いて、主人は満足げに頷いた。まるで初めからその言葉を待っていたとでもいうような表情だ。商品に手を出すだけに留まらず、男はまだ少年を金稼ぎの道具――つまりは見世物として使おうというのだ。まだくらくらと揺れる視界が快感の余韻によるものなのか、主人の言動によるものなのか少年にはわからなくなっていた。

「それはそうと、またお前はわたしの命(めい)に背いたね。今から存分に折檻する」

主人から浴びせられた言葉は非情で、少年を更なる絶望の淵に落とす。

「君たち、二輪挿しはしたことあるかね」

主人が問えば、男たちは主人に負けず劣らずの下賤な笑みを浮かべ頷いてみせた――。

「いや…っ！い″や″あ″……っ！！」

男たちに押さえつけられながら、少年は再び絶叫していた。いくら躰が快感を欲していようと、度の過ぎた快楽などただの拷問だ。布団の上に胡坐をかいた男の脚上に、向かい合わせで座らされる。脚を大きく広げむきだしの股間を男の腹に押し付ける体勢になってしまう上、桃のような尻の割れ目に、熱くそそり立つ極太の肉棒がぴったりと密着する。

「いやあぁああぁ……っっ！！！」

とうに襦袢の取り払われた全裸の身。軽々と背後から抱え上げられ、少年の後孔が太魔羅（ふとまら）の先端に番（つが）わされる。抵抗したくとも躰にうまく力が入らず、少年を抱える脇腹の手にさえ淫靡な感覚を覚えてしまう。先程達したことで全身がますます敏感になり、躰の奥がより強い刺激を求めているのが自分でもわかった。けれど、慣らされもしない孔を知りもしない男のもので貫かれることに対しては恐怖しかない。

「じゃ、一本目貫通。いきま～す」